

MACF礼拝説教要旨

2021年10月24日

【ヨハネの生き方】

ルカによる福音書3章15節～20節

3:15 民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。

3:16 そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

3:17 そして、手に箕(み)を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

3:18 ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。

3:19 ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、

3:20 ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

1) 人からの評価の後に 3:15

ヨハネは人々からの高い支持と好評を得ます。

人々はもしかしたらこの人が約束されたキリストなのかもしれないと考え始めます。明確な悔い改めの説教やその生活振りなどから見ても、単なる宗教家というのとは違う何かを持っていたのだと思います。

「もしかしたらキリストかもしれない。」「あの人は普通の人じゃない、たいしたものだ。」という評判を得るようになった時、ヨハネはどのような風に対応したでしょうか。

人は、褒めてみるとその人の本性がわかるといわれます。

つまり、褒められてその気になってどんどん生意気になる人と、誉められても前とかかわらず誠実に自分の役割をこなして行く人と。

ヨハネは明確に自分の役割を自覚し、自分がキリストではないことを証しします。

使徒言行録12章には、自分は神かもしれないと高慢になったヘロデ王が悲惨な死に方をしたことが書かれています。このヘロデはヨハネを殺したヘロデではありませんが、クリスチャンを迫害しヤコブを殺した王です。自分の身のほどをしらない人間として記録されています。

使徒言行録12章

12:21 定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、

12:22 集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

12:23 するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。

神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。これは極端な例ではありますが、心に留めておく必要のある内容だと思います。

イエス様はしもべのあり方についてこう教えました。

ルカ17：10の言葉です。

17:10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、

『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

偽りの謙遜からではなく真実な証しとしてこういう言葉が口から出せたらすばらしいなと思います。

2) ヨハネのキリスト理解 3:16

それではヨハネはキリストをどのように理解していたのでしょうか。

1. 履物のひもを解く値打ちもない

履物の紐を解くという言葉は、当時奴隷の仕事でした。

しかも外国からの奴隷の仕事でした。

お客様のサンダルの紐を解き、入り口のところで足を洗う作業はまさに奴隷の日常的な仕事だったのです。

しかし、ヨハネはキリストとの関係について、私には彼の靴の紐を解く値打ちもないと告白しています。

つまり「私はキリストの奴隷としてその役割を担えるかどうかさえわからない。」という謙遜な意志表示です。

キリストとの力関係、役割の関係について言えば、まったく別格という理解です。私とは次元が違う存在として理解しているのです。

私たち現代人は、こういう奥ゆかしさというか、正当な位置や立場の関係の理解が苦手です。だれでもみな平等、だれでもみな同じという発想の中で育った私たちは、キリストとの関係を「履物の紐を解く値打ちもない」とは考えにくいのです。

中には「私はキリストの為に教会を作っている」とさえ言う人があるかもしれないほどです。

私はキリスト教界の中では大したものだという心は、ヘロデ王の心と似ています。しかしこの心は実に簡単に私たちの心に入りこみやすいと思います。

さきほども引用しましたがルカ17章の言葉は今日の鍵となる言葉です。

17:10 あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

ヨハネのキリストに対する距離感は、礼拝者としてふさわしいものだったと思います。

2. 聖霊と火をもってバプテスマをほどこされる方

さらにヨハネはキリストが来て、聖霊と火とをもってバプテスマを施すことを教えました。

聖霊と火とのバプテスマというのはいろいろな説明がされていますが、

ヨエル2：28-30の預言のように人々に聖霊を注ぎ、生活をきよめ、新しい力で満たし、しかも厳しいさばきを行う、とヨハネは語るのです。

人間には提供できない霊的な祝福の本質をキリストは提供してくださるのです。

キリストは信じる私たちの心に聖霊をお与えになり、そのお方が私たちの心を満たす、

そのお方が私たちの心にあふれるような生き方をさせてくださるのだというのです。

それは、いわゆる儀式的な水のバプテスマとは本質的に違う、もっと内容の豊かなものであり、現実的に心を取り扱うものとして教えられています。

キリストはまさに神ご自身だという告白でもあります。

イエスキリストは、私たちの心を聖霊で満たそうとしておられます。
み言葉を心に留め、キリストを主と礼拝し、謙遜に歩もうとするものに、
聖霊を注いで下さり確かに心の中に不思議な働きを実行してくださいませ。
礼拝したい心も聖書を求める心も、聖書を理解できる力も知恵も
聖霊によってもたらされるキリストからの恵みです。
悔い改めも、奉仕も同様です。自分の力や頑張りではないのです。

ヨハネは、キリストは主であり、私たちの考えを遥かに超えた存在なのだとして理解しています。実際に人を作り変える力のある存在として、神様ご自身が人間をみるようにキリストも私たちを見ると教えているのです。

そしてヨハネは福音を語りました。福音とは神様からの「よい知らせ」「Good News」です。

キリストに希望を託すことを教えるメッセージが福音です。

自分の力でがんばらせるメッセージは一見福音のように感じますが、実は不公平な内容、

能力があり、出来る人への知らせではあっても、弱いものへの良い知らせではありません。

キリストは聖霊を注ぎ、私たちの内側に神の愛を味合わせ、また神への愛を増してくださいませ。清さを求める生き方に向かう力を与えてくださいませ。

3) ヨハネの投獄 3:19-20 : マルコ6:14-29参照

そのヨハネも捕らえられ、投獄されます。詳しい内容はマルコによる福音書6章14節からの

箇所に記録されています。

ヨハネはヘロデ王の性的な問題を指摘したことによって、投獄され、最終的には殺されます。

キリストを指し示す役割を担ったヨハネの姿勢は一貫して「悔い改めを促す」ものでした。

ヨハネは、王であれ兵士であれ、一般人であれ、神様の前にふさわしくない罪を悔い改めるべきことを真剣に、本気で語りつづけたのです。その結果、捕らえられました。

しかし、ヨハネは罪のもたらす深刻な問題の大きさを知っていたのです。

聖書はこういうヨハネのような生き方を推薦しています。
罪と戦うという姿勢。罪から離れるという姿勢。清さを愛するという姿勢。
赦しはあるのです。癒しもあります。
だからこそ悔い改めて姿勢を正すことが大事なのです。
ヘロデはその声をシャットアウトし、無視しました。それは大きな過ちでした。

ヘブライ人への手紙にはこうあります。12：1～6

12:1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、

12:2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

12:3 あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。

12:5 また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

12:6 なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

今朝、神様はあなたに何を語っておられるでしょうか？

各々心を静めて、神様からの語りかけに心を向け、その声に従いましょう。

祝福を祈ります。

関根一夫

「MACF礼拝映像」はこちらです。

<https://youtu.be/BeqyV2gJMUM>